

## □ シア使節プチャーチンの来航によって 生まれた書物の話

奥 正敬

### ■はじめに

本誌の227号から連続して、ロシア関係の書物をご紹介します。

ロシアは17世紀に活発化した東進政策の成果が極東にまで及ぶと、引き続き南下政策をとり、日本との通商関係の樹立を模索しはじめました。歴代のロシア皇帝は18世紀の後半以降、ラックスマンやレザノフを相次いで使節として日本へ送りましたが、いずれも鎖国の壁に阻まれて成功することはありませんでした。その後、交渉に失敗したレザノフの単独命令に端を発する日本側への軍事攻撃、所謂、文化魯寇（フヴォストフ事件）と、日本側がロシア艦の艦長を捕縛したことに対し、急遽ロシア側が捕虜にした日本人商人との交換で解決をみたゴロヴニン事件を挟み、3度目の使節としてエフィーミ・プチャーチン（1803-1883）提督を派遣することになるのです。（詳細は次頁の表の通り。）

本稿ではプチャーチン使節に同行した秘書官イワン・アレクサンドロヴィッチ・ゴンチャロフ（1812-1891）による『日本滞在中のロシア人』の自筆フランス語稿本（本学図書館所蔵）について、この書物のロシア語原本から日本語へ抄訳した井上満氏の『日本渡航記（フレガート「パルラダ」号より）』を参考にして説明します。そして、この来航がきっかけとなって生まれた露日辞書『和魯通言比考』と、その後の顛末をご披露いたします。

### ■クリミア戦争開戦前夜の艦隊行動

プチャーチンは、嘉永五年にあたる1852年の

秋にサンクトペテルブルク沖のクロンシュタット軍港をフリガット艦パルラダ号で出港して日本へ向かいました。ロシア海軍の歴戦の勇士でエリートでもある彼は、アメリカのペリー提督の訪日予定情報を掴んでいたロシア政府が日露交渉の切り札的な存在として、全権使節に任命した人物です。

秘書官のゴンチャロフは、この時41歳になっていました。モスクワ大学卒業後、ウリヤノフスク知事の秘書や財務省の外国貿易局に勤務していたといわれます。その傍ら文筆活動を続け、出世作である小説『平凡物語』（1847年）の成功により、文壇で認め始められた頃の旅立ちだったのです。<sup>(1)</sup>

プチャーチンが率いるパルラダ号は、バルト海を出てイギリスのポーツマス港に入港しました。同港で戦力強化のためスクナー船ヴァストーク号を購入し、2隻は大西洋を南下してケープタウンから東南アジアに向かい、ジャワ、シンガポールと香港を経て小笠原諸島に達しました。ここで、カムチャッカのペトロパヴロフスクから南下していたオリヴェツァ号と輸送船を合わせた4隻、これはペリー艦隊と同数になりますが、この隻数で艦隊を編成して長崎へと向かいます。

プチャーチンは嘉永六（1853）年7月18日（旧暦・以下日本に関する箇所は旧暦を用いる）に長崎へ来航しましたが、江戸から赴く日本側全権を待つ間に、開戦直前であったロシアとトルコとの関係（後にクリミア戦争に発展）に係わる情報収集のため、上海へ向けて出港します。

## 江戸時代、日露間の主な出来事と関連して上梓された代表的な書物 (京都外国語大学附属図書館所蔵分)

ロシア語図書は日本語書名を用いた。

### 寛政四(1792)年 ロシア使節アダム・ラックスマン来日

漂流民 大黒屋光太夫らを帯同する。通商交渉は失敗。

- 寛政六(1794)年 桂川甫周『北槎聞略』編纂。

### 文化元(1804)年 ロシア使節ニコライ・レザノフ来日

漂流民 津太夫らを帯同する。通商交渉は失敗。

- 文化七(1810)～文化十一(1814)年 クルーゼンシュテルン『世界周航記』刊行。
- 文化四(1807)年 大槻玄沢・志村弘強『環海異聞』編纂。
- 明治二十八(1895)年 レザノフ「日本滞在中の日記」刊行前の雑誌論文『19世紀初年日本に於けるロシア使節』に一部抜粋。

### 文化三(1806)年 文化露寇(フヴォストフ事件)勃発

ロシアのレザノフの命を受けた彼の部下が樺太など、北方の島々の日本人村を襲撃。1808(文化五)年アレクサンドル1世によって出された撤収命令で終結に向かう。

### 文化八(1811)年 ゴロヴニン事件勃発

松前奉行所の役人、国後島でロシア艦長ワシーリ・ゴロヴニンらを捕縛。ピョートル・リコルド副艦長、高田屋嘉兵衛を捕らえ、捕虜としてゴロヴニンと交換。

- 文化十三(1816)年 ゴロヴニン『日本幽囚記』刊行。
- 文化十三(1816)年 リコルド『日本沿岸航海および対日折衝記』刊行。
- 文政八(1825)年 高橋景安校訂『遭厄日本紀事』成稿。

### 嘉永六(1853)年 ロシア使節エフィム・プチャーチン来日

翌年日露和親条約を締結。

- 記述年不明 ゴンチャロフ『日本におけるロシア人』のフランス語の手稿ができる。
- 安政四(1857)年 ゴシュケビッチ・橘耕斎『和魯通言比考』刊行。

彼は極東にあっても母国の動向に傾注しなければならず、上海でその目的を達すると長崎へ戻り、江戸から出向いた川路聖謨と筒井政憲かわじとしあきら つついまさのりからなる全権と交渉を重ねました。この会談で開港交渉について「貴国をもって第一とすべし」な

どと日本側全権から引き出した言葉を合意に向けた確証と認識し、再び出港してマニラに向かいます。この海域でトルコを支援する英仏艦隊を避けながら艦船修理と薪、水などの補給を済ませ、3度目となる長崎へ入港しました。江

戸に戻った日本側全権に国境画定のための北方での会談を提案するメッセージを残し、今度は朝鮮半島沿岸からシベリア沖を北上し、イムベラトル（現在のソベツカヤ・ガバニ）湾に投錨します。1854年6月にはシベリア提督と会談後、老朽化の激しいバルラダ号から代艦のディアナ号に旗艦機能を移しています。

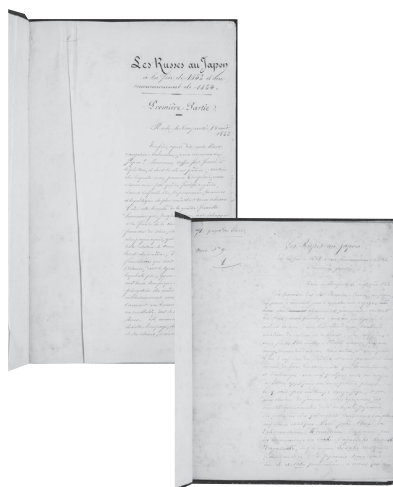
同時にプチャーチンは任務の性格が外交使節から軍務に戻ることを想定して、ゴンチャロフを秘書官から丁重に解任し、陸路サンクトペテルブルクへ帰還させました。これによって、ゴンチャロフの日本関係書の記述内容の基となる遠征体験は概ね終わったのです。

### ■ゴンチャロフ、訪日記録を発表

日本語への翻訳者である井上氏によれば、ゴンチャロフは1855年に首都へ戻ると「日本滞在中のロシア人」という論文を海軍雑誌『海事集録』の同年9号から11号に連載し、同年に単行本を刊行していたと述べています。この論文と単行本には、日本を初めて訪れる時に寄港した香港、その後の小笠原諸島、長崎入港、情報収集のための上海、長崎での日本側全権との交渉<sup>(2)</sup>、さらにはマニラでの艦船修理、琉球などの様子が書かれています。

以下に写真で紹介する2冊は本学図書館が所蔵するもので、ゴンチャロフが著した『日本滞在中のロシア人』(Les Russes au Japon en 1853-54)の自筆フランス語版稿本です。小版は下書きで、大版は清書と考えられます。しかし、この稿本ではフランス語版が、いつ、どこで、印刷刊行されたかは明らかではなく、現在のヨーロッパ各国の中央図書館でも、当時出版されたフランス語版の書誌データは見当たりません。

さらに、ゴンチャロフは1857年になると『フレガート艦バルラダ号』を2冊本で刊行します。



同書にはバルラダ号の出発前後のゴンチャロフの心情から始まり、前述の航行ルートにおいてプチャーチンが示した考えや、乗組員と関係者の記録、寄港地の様子など、秘書官解任後の帰途となったイルクーツクまでを纏めています。

また、先に単行本で刊行した『日本滞在中のロシア人』も含まれており、日本側全権との交渉記録が詳細に書かれています。ここでの文章表現力について、日本語への翻訳者の井上氏も「川路以下日本代表に関する叙述の確かさ、行文の軽妙流麗なこと」<sup>(3)</sup>などと評価しています。

### ■日露和親条約の調印

さて、話は極東に戻ります。敵に渡ることを恐れてバルラダ号を焼却し、ゴンチャロフをサンクトペテルブルクへ戻したプチャーチンは、4隻からなる艦隊編成を解き、僚艦を英仏戦への備えに回すなどして臨戦態勢を整えました。そして、自らはディアナ号単艦で箱（函）館と大坂（阪）を経て、嘉永七（1854）年9月20日に伊豆の下田へ入港しました。この時、既に日本はアメリカ（同年3月3日）とイギリス（同年8月23日）との和親条約の調印を終えていました。プチャーチンも下田において川路や筒井ら日本側全権団との交渉を進め、12月21日に念願

であった日露和親条約の調印にこぎつけたのです。これによって日本は、下田、箱館、長崎の3港を開くこととなり、両国は択捉島と得撫島間を国境に定め、樺太は両国の雑居地となりました。

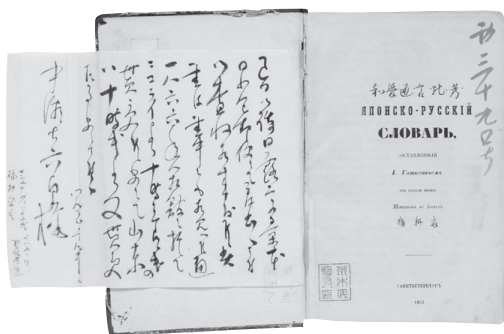
しかし、プチャーチンが幕府と条約交渉をしていた最中の11月4日、関東一帯が大地震にみまわれ、乗艦ディアナ号も津波に巻き込まれて大破するのです。幕府は帰国のための代替艦の必要性を認め、彼と乗組員は急遽、伊豆半島の戸田村で村民の協力を得ながら洋式艦の建造に取りかかりました。このように外圧や自然災害に苦しんだ日本は、日露条約調印を前にした11月27日に元号を安政に改めます。<sup>(4)</sup> 翌、安政二(1855)年3月22日になると、使命を果たしたプチャーチンたちは完成した戸田号で漸く帰国の途に就くのです。

### ■日本人「橘」ロシアで辞書編纂に尽力

話は少し戻ります。プチャーチンたちが戸田村で帰国のための代替艦を建造している間の出来事です。プチャーチンの中国語通訳官アントノヴィッチ・ゴシュケヴィッチ(1814-1875)<sup>(5)</sup>は、遠州掛川藩を脱藩して僧侶になっていたとされる立花久米蔵(1820-1885)という人物と知り合いました。<sup>(6)</sup> 意気投合した2人はロシアの傭船で密かに日本を離れ、途中、イギリス艦に拿捕されながらも、香港やロンドンを経て1856年にサンクトペテルブルクへ到着しました。

立花はこの地でゴシュケヴィッチの日露辞書の編纂を助け、翌1857年に共同で『和魯通言比考』(Японско-русский словарь)を刊行しました。(本誌の表紙参照)この辞書は洋本仕立てで、イロハ順にカタカナと漢字で日本語を記載して、それをロシア語に対訳する形がとられています。

内容の記述は左右2段組みで、約15,800語が本文423頁にわたって展開されています。刊行



はロシア外務省アジア局が担当し、立花は標題氏にゴシュケヴィッチと共に「橘耕齋」として記載されています。彼は日常「ヤマトフ(大和夫)」と名乗り、ロシア正教の洗礼を受けて外務省の通訳官やサンクトペテルブルク大学東洋学部の教員になったといわれます。

### ■『福翁自伝』に見るヤマトフ

『和魯通言比考』の刊行から4年を経た文久元(1861)年、幕末の洋学者である福澤諭吉が、徳川幕府の開港延期交渉を任務とした使節団に随行してサンクトペテルブルクを訪れます。彼は晩年の著書『福翁自伝』に「露政府の厚遇」として思い出を記していました。

「(前文を省略)その節露西亜に日本人が一人居ると云う噂を聞いたその噂は、どうも間違いない事実であろうと思われる。名はヤマトフと唱えて、日本人に違いないと云う。(中略)そのヤマトフに遇て見たいと思うけれどもなかなか遇われない。到頭逗留中出て来ない。出て来ないがその接待中の模様に至ては動もすると日本風の事がある。例えば室内に刀掛があり、寢床には日本流の木の枕があり、湯殿には槽を入れた糟袋があり、食物も勉めて日本調理の風にして箸茶碗なども日本の物に似て居る。どうしても露西亜人の思付く物でない。シテ見ると噂の通り何処にか日本人の居るのは間違いない、明

わかつに分て居るけれども、到頭分らずに帰て仕舞いました。(後略)<sup>(7)</sup>

などと、福澤はロシア帝都での滞在を懐古します。

立花からすると、おそらく「自分は国禁を破って海外へ出奔した罪人であり、日本人に会うことなどはできない」という思いだったのではないのでしょうか。しかし、邦人がいない環境の中で、来訪した同胞をもてなすことは大きな喜びであったのかもしれませんが。

時代が明治に移ると、立花はロシアを訪れた岩倉使節団やロシア公使として赴任した榎本武揚えのもとたけあきから帰国について打診され、明治七(1874)年に母国へ戻りました。渡露のきっかけを作ったプチャーチンやゴシュケヴィッチに見送られることもなく、嘗ての漂流民だいいくわの大黒屋光太夫こうだゆうと津太夫つだゆうたちに比べても静かな帰国であったようです。

## ■人々の動きから生まれた書物

プチャーチン提督による安政元(1854)年12月21日の日露和親条約の調印には、初めて通商関係の樹立を求めて派遣された使節アダム・ラクスマンの来日から62年の歳月を要していました。その間、ロシアは多くの日本の情報を蓄積していたようです。

日本でもロシア使節の度重なる来航や漂流民の帰国など人々の動きがあり、そこから生まれた書物によってロシアに対する知識は確実に高まっていました。

このような中へ訪れた3度目の使節プチャーチンは、母国の戦争が使命へ波及する危険性に配慮しながら行動し、結果的にアメリカやイギリスに日本との和親条約締結の順位を譲りました。そして、日本が大震災で混沌とする中ではありましたが、念願の条約調印を成し遂げました。同時に、今日考えると全く不当な手段ですが、

自国の日本語教育の原点となる近代的な言語辞書の完成に向けた人材も獲得したのです。

日本が明治時代に入ると、プチャーチンの知力と徳川幕府の勇断で開いた「道」を通り、多くの人たちが行き交うようになりました。その後も戦争の時期を乗り越えながら、経済や文化の交流が進展してきました。しかし、今日、両国間には北方領土問題など長年にわたる未解決の問題があり、これまでに何度も議論が重ねられてきました。その間、日本では内容と交渉過程を体系づけた「書物」が多く公開されており、このような情報の蓄積があってこそ、議論の本質が色褪せることなく継続できているのです。

現在の日露間の問題については、嘗てプチャーチンが母国にとって厳しい国際情勢や乗艦を失う自然災害までも追い風に変えて、積年の課題であった日本との条約調印を成就した姿を顧みる時、奇しくもこの問題の解決へ向けた示唆が得られるのではないのでしょうか。

## 主な参考文献と註記

- ゴンチャロフ著 井上満訳『日本渡航記(フレガート「バルラダ」号より)』岩波書店 1941年。
- 日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂書店 1984年。
- (1) ゴンチャロフは帰国後、小説家として大成し、『オプローモフ』(1859年)、『断崖』(1869年)などを残した。
- (2) この時、日本の民間で流布した資料として、川路聖謨による『長崎日記』や長崎へ随行した儒学者古賀謹一郎の『西使日記』などがある。
- (3) ゴンチャロフ著 井上満訳『日本渡航記』398頁。
- (4) 本稿では改元の布告された日からあとを、新年号の元年とする(即日改元)見方をとる。
- (5) ゴシュケヴィッチは『和魯通言比考』を刊行した翌年の1858(安政5)年から初代の箱館駐在領事となる。
- (6) 詳細は『GAIDAI BIBLIOTHECA』168号10-11頁の拙文を参照のこと。
- (7) 『福澤論吉著作集』第12巻 慶応義塾大学出版会 2003年。166-167頁。

おく まさよし(司書・市民)

コロナ対策の一環で本誌の刊行が縮減し、前号で予定したロシアシリーズの完結が遅れました。これを以て『本学図書館のスペシャル・コレクションより』は終了いたします。